

令和元年度花巻市民芸術祭第13回文芸大会

一般の部 入選作品

【詩】

*作品募集の部

・芸術祭賞

「つぼみ」

伊藤 諒子

夕間暮れの道辺に
芙蓉の花が咲いていた
少し疲れたよう
ほの白く大きな花びらが
微かに やわらかに揺れている

花の大きさが
20センチほどもある
花の陰のほう
大きな葉の間に葉巻の様なもの
それはすでに花色を含み
螺旋状に巻いているつぼみだった
あした開くであろう つぼみ
長さ10センチはある
掌に卵ほどの重さがいとおいしい

大きな花には大きなつぼみ
当たり前のことなのに
今の今まで

つぼみといえば小さくて愛らしいもの
きっと咲けよと後押ししてしまうほど
いじらしくもあるもの
と 思い込み
乱雑にインプットしていた
思い込みの隣に
気付いたばかりの一行を加える

当たり前であることを
意識することなく過ごしてきたことの
なんと多いことか

花は花であり
人は人であり
自分は自分であり

ありのままに
当たり前を生きていけばいい

大きなつぼみを
葉の間に戻す

いまさらに
たどり着いたあり方の着地点
稚いと自嘲しながら得心すると
芙蓉の花が小さく頷いたよう

刻々と時間が流れ
たがいなく 一日が暮れていこうとしている
薄明りの中

・優秀賞

「ヒリニモチゲ」

朝倉 了子

夕べ夢を見た
今は亡き父と母　そして十四歳上の兄がいた
夢の中で　ゆで玉子を作ろうとしていた
場所は実家の昔の台所　囲炉裏
所が一箱全部の卵にヒビが入っていた

最近夫が「ゆで玉子が食べたい」と言う
だが作っても作っても殻が上手くむけない
そんな事があって夢を見たのかも

「卵全部にヒビが入ってるー」と私が言えば
父の口癖
「あー　よしよし」と笑っていた
その時　兄がボツリと言った
「ショーボーのヒリニモチゲ」
「ヒリニモチゲ」

そこで夢が切れた

目覚めた朝
兄の言った言葉を考えた
何と言ったのか
ヒリニモチゲ　ヒリニモチゲ

分った
ゆで玉子を作って消防の集まりの日の
「お昼に持っていけ」
兄は私に　そう言ったのかも
長年地元の消防団に入って頑張っていた兄
そんな姿を私はいつか心に留めていたのか
兄が逝って五年
久しぶりに無口だった兄の声を聞いた

秋彼岸が目の前
ダンゴを作って姉たちと会いに行こう

・奨励賞

「オレは疾走^{はし}れない」

安部 勝衛

オレはずっと
海の底で眠っていた
と まるで
投光機の照射を受けたように
急に強烈な太陽を浴びた
あ 陸地だ
オレの住んでいた
オレが疾走っていた陸地だ
吊り上げられた
オレの体からは
身に纏いついた海藻や
貝どもがたくさん潮を吐き
音をたてて滴る
何十人かの間人間達が
一斉に異様な声を上げ
吊り上げられた
オレを見ている

八年前
美しく輝いていた筈の
オレのその白い肌に
貝や
連獅子のあの髪のような
長い海藻がへばりついていて
寡つての面影も無い

そのオレの姿に
人間達が
衝撃と嘆きの声を上げているのだ

見覚えのない屋並みが見える
瀟洒な新しい家が
整然と並び空が眩しい

遠くに

白い真っすぐな道が見える
寡ってオレが疾走っていた道だ
おお 道幅が広がっている
曲がり角が無くなっている

そしてオレは
あ と気がついた
もうオレは疾走れないのだ
廃車置き場へ運ばれるだけなのだ

やがてオレは
ゆっくりと地上に降ろされた
足元のバネがギギッと鳴り
オレは目を瞑った

・佳作

「母さんのポケット」

有原 すみれ

母さんのポケットは小さいが
大きな空がある
白いモコモコの雲を遊ばせる
入道雲もだしてみる
時に大雨を降らせたり
大きな虹を描いてみたり
夏は雲をキレイにしまい青空にする
ギンギラギンの太陽をプレゼント

真っ黒な雲だってある
でも空は考える
真っ黒な雲は不吉な予感
嵐の前兆
青い空は平和の印 幸せのかたち

母さんのポケットは小さいが
大きな海がある
深くて広い海がある
海の水が蒼いのは
空の蒼を映すから
海の水がしょっぱいのは
悲しみの涙をいっぱい溜めたから

母さんのポケットは小さいが
いつもフカフカだ
喜びも悲しみもそして悔しさも
みんなポケットにしまい込んで
それでもいつもフカフカだ
きっと何でもフカフカにする
マシンがある
みんなを幸せにするマシンが

・佳作

「蝉しぐれ」

英 阿音子

あの日のように蝉しぐれ
樹々に溢れる蝉の声
一樹一樹に溢れている
己の命の限りまで
焼けつくような炎天へ
風に乗り、波のように
鳴いている

征ったきり
いまだ戻らぬ
いまだ、ジャングル、海の底
あまたの兵士のたましいが
さまよい続けている

あの日のような蝉しぐれ
その中から
さまよひ続けるたましいの声
淋しそうな声
会いたい人を呼ぶ声
いつになったら会えるのか
泣いているように 鳴いている
もくもくと鳴いている

あの日のような蝉しぐれ
ためらいのたましいを
しっかりと抱き寄せている蝉の声
ふるさとの樹々のゆりかご
ゆっくりと癒されてほしい

蝉しぐれ
しっかりとしっかりと癒してほしい
あまたのたましいを・・・・

・佳作

「詩に魅せられて」

ルディア・ひろこ

何をやっても所詮底の浅いばあさん
幼い頃から惹かれていただけで
詩のようなものと向かい合ってしまった

ずぶの素人が詩などおこがましいのだが
折々に思いうかんでくる言葉を
並べ変えては体裁を整えてみたくなる

見たもの感じたもの考えたことなど
生きる中で感動しては言葉を探す
綴ってみて表わし方に苦勞する

漠然とだが憧れていた文学の世界
特にいい詩は字面を見ただけで惹きこまれ
ハートを掴まれ伝わっては圧倒される

形はそれぞれ違っても
表現力のみごとさに妬ましいほど感心する
世の「これぞ詩」にシャッポを脱いでいる

・佳作

「村の老人は語る」

佐々木 茂夫

また今年も稲刈りのシーズンがやってきた
田んぼのあぜ道に三人の老人が集まり
何やら深刻な話をしている
一人の老人がいかにもだるそうな声で言った
いやあ・今年はぬぐいな・なんだこのぬぐさは
おらあ・今まで生きてきてこんなにぬぐいのは初めてだ

するともう一人の老人が口をはさんだ
おらも同じだ・・午前中はいいけど
午後になると家の中にはいられねえよ
んだからこうして田んぼを回って歩いているのさ
おれたち百姓にはこの時期が一番楽しみだからな
この黄金色の稲穂の重みたまんねえなあ

んでもさあ俺らの時代はいいけど
これからの若い人たちどうなるんだべ
百姓だけでは暮らしていけねえからな
三人目の老人がため息まじりに言った
これで百姓も終わりだな
この一言で三人とも黙り込んでしまった

しばらくしてこの中で一番年のいった老人が
んにゃあ・俺たちがしょぼくれてどうするんだ
この田んぼの色を見ろ
キラキラと光っているじゃないか
この幸せを忘れたらばちが当たるよ
三人の老人は名残惜しそうに田んぼを眺めながら
それぞれの家に帰って行った